

支東

一二

春二

支本和歌抄卷第一

春詠一

題

歲內春

朔日

元日宴

立春

初春

子日

卯日

希葉

白馬

津脅會

賭射

歲內春

重慶圖書館藏

歌杯控萬葉所註歌也以使此已下皆故下

新流古雜一

岁内春

後漢草書

歲內春

後漢草書

月

月

月

月

月

歲內春

後漢草書

月

月

寛元六年六帖題卷之四

四
卷之三

冬はまだ春立てぬ日朝すと色どりさてもひそむ行
夏之夏月

卷之三

下へ
これまでの年月とよりよきちへんこがくをうれしもの
百育ちるま
後二住家隣々

冬の夜は、おもむろに雪が降り、夜の静けさを深めます。

永久空年百々回^{トシ}立春

金華集卷之二
神祇作頭仲

也。其後此之謂也。初年三十而生子。

卷之三

後百廢

○ さくらのまつり
○ さくらのまつり

卷之三

卷之三

卷之三

龜山庵
上毛の意
吉十

久承上幸安日一首丁未年
山東人王士禛書

田家
卷之二

六中是吾君
林仲思

毛毛立たぬのかく人を喜ばせ
（猪吉）

萬葉集序收卷之三
下方竹哥

重ねて手に持つておきたいとおもひ立つたのである

而りは解

年々月日をかけてひよるもしあつてこゝとぞくむら

えす家集き、家居云歟と人あすひやうに何すれ

んそとひくとはまつしものゆりとあづけよ

年内ハシマよしのうすまわくつゝまわらとぞとぞ

六帖タカ

射

射うらよまつともまち時つままふもとすが

等家集下セリあま集イチ云取れ二家集年十二月五日朝ノミ

左赤門由

ちくさんたと唐物タカモノの内ノミのうせせよまり給

ぬ時ノミのとく

射

家集イチ五日中

射

中納言家持ノミ元

立ハキメめとり

射

四

荀子卷第十四

河井の時代をこよなく愛する者
寛永元年暮入内屏風
裏表判
家
支那事の通商改
初玉の花のうちかねと極て
高麗

四

ひそかにとおれども立毛の毛の毛がよろしく

中

家集元白以之

卷之三

西風立候之日よりは、天子の御内閣に
宣傳院官、
大内少輔、
才考秀林常太郎の五年正月朔日宮廟に

東晉書

卷之三

義泰以衣受雪為佳瑞哥
家集立書

卷之四

六百首歌今竟自宴居少府家建久元年

三位經書

千五百首詩合建仁元年

宮殿大門
たてまつる
元年
窓元二年工に帖題沐室

卷之二

家康光
立
たてまつる
木
木の生肉下
も

朝日

内

の景也

文集

内

之後朝日

家
そなへる事

と朝氣をうあたどめうすりれまししきの風
家集え自國寫　あり上人
あめかげて、てつろ宵のねよみてまの戸門も雲れと
尾山房
文永九年毎日一首工のや

民詠である事

年毛うしよゑひ年　とらふみやくわくふ年毛

鷹狩年

現存
十津川

朝の心とまとと
天皇内大臣

鷹狩年

現存
十津川

朝の心とまとと
天皇内大臣

或おえくとひ吉姫のむすよ國極とひ吉姫

とせちあゆけすもとをとめてかれてあけ
と朴功身后宮はほる天皇とものね
内内　「うりけつよひうきとくまつせとあ
ひは真や又ワ葉とまいをうりけうきと
しうりけとくまつせとくまつせと
たまて角吹けうきとくまつせはワクシヒと
あくまやとて角ようこうもて角木まほ
其くすくとくまつせまつては葉とまら
すれや角音含よるうじとすて葉
まつせ

永久五年四月え日　後村朝日

張天ヶ村頃大正五年
餅字下細子妻木穂
成就號入後屋内
焼熟善吉歌詞

子内にあつてお年をとて又寝ぬる中老
のよき處也

法楊殿閣

卷之三

卷之三

まことに其の事は御心付や百萬のものありせしも
此う不才もじよすと云ふ事すも大歎
く文書万葉より出づる之方云とよせ
りもつて之をもう事をた陳えり
くの席令とよめありとど一宣令によ
みうへ判者後醍醐天皇
は必ずそしゆをとむればやまと萬葉
集よほとにじよき事かくようすとひ
えひう但万葉より出づる三公の内へとおも
被候とすとまにす万葉集へ覆ふ

立春

家集

席中納言匡房

新松谷上書
立りて之をとておもひとおもひとおもひとおもひとおもひと
日本書院の事とす
有原春陽

千五百首五言

卷之三

同上

卷之三

卷之三

傳曰：「孤獨也。」海入水，則其勢孤也。夫萬物之生，皆有其體，各得其宜，故能成其生焉。若失其體，則無以成其生矣。故曰：「孤獨也。」

壬寅年夏
王國良書

卷之六

10

壬午年正月廿二日
平五首番三合
大納言國具之
イナシテ音川

大納言固其
傳くより

イニシテ嗜焉

卷之三

二

とおどりやこのよ

卷之三

古事記傳

卷之三

卷之三

順治元年

文元年

卷之二

家集卷之三

卷之三

久安百福

有厚實清潤之

卷之三

翠すとも音を序くとちいと風を吹よみや車を廻る

寛元二年六帖影

巨三経知家之

わらむ久重年始とてへれぬとむりあらまよ

建長八年歌合

前大納言顯明

わくはまを年と月とよりけのうりがき軍隊

題一十

人九

玉車とくとくもつけずお城のゆつもとくせき

兵多院入通ニ下取とむ幸首

大義と有家

開戸と門

お城のゆつもくにまきの御

門

天の戸のあまくやくくもまき

お城のゆつもくにまきの御

百首玉暁立春

後二住家謡

わらむとせのまれ始とてへととひまきの

百首平元日立春

牢並は所

立つて年とよとやまかくすりお城と越く來し

月

五十番立合

玉翁山とよとよれすとよと年とよととあせ

西座一年百首

かね後

あく春のとよとよれすとよと年とよととあせ

月

ひととじよとよれすとよと年とよととあせ

百首立春

巨三経知家之

ひととじよとよれすとよと年とよととあせ

百首立春

巨三経知家之

前津金面古事記
宣稱日謂之朝日
越之朝日之朝日
朝廷謂之朝

百首序

殿宣院大將

志木の戸とひまひまやしもんねよまく 同ゆう
あ集立吉朝とよすつ而り上人

○年くわぬ喜く一ひとともとほくくみてかずまう

思ねの家院

古

西洞院百首山中

後事院行政

冬の夜れどもさとうめうのよまもうれえあらま
治承三年を大にあ百首山中

青春

下

かゆのととみ喜月じくはまほのよまうしてよま
浦集

古

年くわむ井井とよまはとくとよまきものれ
建長八年家百首序合

後事院大判

すゑくせりやまかせく海山すまつ岡と吉澤

浦集立吉

下

春来よとひのそりやまかせくすよしと望

弘安八年百首山中

入通あ政大臣

万子

入通あ政大臣

家

入通あ政大臣

相

文治五年雨居草

前序納言之家

相

年はまう天保社の柳葉のまのりもとすやまが
建久八年百首

まくれといひりもとすやまう年むとす年の宿
正源二年百首

參拜雅經

下

まくれといひりもとすやまう年むとす年の宿
治承二年を大にあ百首立吉

皇太后御内裏後成

お汝よとれをさよろり春うすこゑすやまく白
月と一乃あら池の冰の解りこの羽絛やまの景

祇園社百首春

逢坂の松より

松にかづみ

祇園精舎の吉能

松にかづみ

祇園精舎の吉能

○此即御神三即天皇の金也

は第一朝拜

天命降下昇

西階

自相助

付

卷頭

二卷頭

四

同

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

逢坂の松より

松にかづみ

祇園精舎の吉能

逢坂の松より

松にかづみ

祇園精舎の吉能

逢坂の松より

松にかづみ

祇園精舎の吉能

逢坂の松より

松にかづみ

祇園精舎の吉能

逢坂の松より

松にかづみ

祇園精舎の吉能

逢坂の松より

松にかづみ

祇園精舎の吉能

松にかづみ

祇園精舎の吉能

松にかづみ

祇園精舎の

久の日のつかひにゆへかくまゝまじき年月にし
立らしも刊

寛平西内居多々合 旅人不

ますと幸りれのとよきやうのとけて玉とみ

近春序屏風圖可

貫之

春之風可くとてよきへにのよしと玉を放
風景上

朱雀序屏風圖可

刀下の山の山よりすもと風をくと見を放
新千春上

家集てのまのう 東度は仰

あくすよのとて娘へが、ろくへ

百萬玉可

けうまでこくじとあわげきは萬のまともす

家集春立日

情中納言定形

晴

天

年すと、冬ニモアリセテ御はせも起ぬトヨモヒテ
禱子内れもあむと合御のもにまとも

かかみたまつ

ゆうき 玄はまくと云時じ御のまもとまど

あ葉

木のうちまほの床のまくすのれとけもくと年

建保三年内にとて百萬玉可

慈祐和尚

水のうちよ高とくらむかくらわきを起る

平宗宣朝にすとけく十萬玉早

永藏名お

わくわよきのとてよもやと風のうく吹

因百首早春

同

雪もまだ半分ぬきあひるともひあら風

月

從二庄家謹

○方
半は木根様
けもだひ
こをひく

百首三處神祇

月

津山のじ月のさと月にて月の初津月といふ
正月五日賀義社御開帳

西園三百首

中村屋

三宿入じう孫一枚を年下でまのをすよ松竹

南山百首寺合

慈法和尚

北山もきよせむのとくよひ病の里よもも

及重慶桔政

後櫻屋
大内

當山者主姓

正月五日
百首三處神祇

弘安元年百首

後水東内大臣

王代よむすみよきくつまも民のちくやまの

建長八年百首寺合 大内守將經也

新緒古今事上

高きゆう頭竹の葉風よこりてちくせの跡

寂勝院天王院石室佛障子

如前は仰

力足や草すもあつ枝の葉乃てあらわすもあ

青松百首古文

後鳥羽院御制

后すそりのあはとけりあはとけりあはとけり

十五百首歌合

從二庄家謹

奥山山下の
院櫻御流下

文治三年百首

新編御定家

平野

是故不

風經看上

何事かのうこはうとの爲よ止りんもしろ年月

○子日

奇文治六年九月朔子日

身生毛店之大久保城

妻自前よれづう子月のねに氣をとて御神
子月よれづう御どめ住吉へまづけえぞ御神

祇園社百育子日

同て

文應元年七月百子子日

民詠爲家

猪

也くもくもせれまどとて御や子日より

内

たどふすの子月のまよにてもとをわたりとひけ
百育す少塙

有原為頤

同

子月すより人見てとぎむねよじ年と打

文治二年七月

待

前守内雲室家

元

也くよれづうのやね家まつとせと来ゆる

百育すを待子月

麻葉は所

奇文治元年八月朔子日

清浦朝

セイ

至ちよかゆのいのうの子月よきまお御妻の子は
大政大臣家子日よきまお御妻よ出候よみて

家主家主

家主

清原元捕

が家主

毛利子日ねこしわやまのえよげてお

事主

承暦三年寺合

大納言經

三イ度

育てよひとすまうまのひとせとつち
子日と

二麻院宣房

良玉
あそれとまうりよりよしとて縁すよ野(のま)

承久三年空寺育房 後二住家降

旅人走ゆとよすまうまくせのまのまうあは

正治二年百育

正治寺經

むすくらむすりん娘中ねもくよのねよゆ
育すれ野のまくすまうじと我出せまくす

西門院門附百育子日

新編大合

七年生まねとまゆよりまくすまくすまくす

有尾郡仲胡

十五百番寺合

前大納言經家

もうこめ神の日のまとし独てまのまけとまのま

題不名

新編大合

二葉うちも引と強めんぬまきをあわとねとま

人丸

同

中納言家持

初喜多い文のまのまくすまくすまくすまくす

西門院門附百育子日

仲宣頭

玉とくさまわゆとまくすまくすまくすまくす

久安百育子日

大納言隆喜

かくすまわゆと成すけとものまくすまくす

正治二年百育

奥美后

太支後房

千五百卷

西漢書

後
正
元
年
首
高
弟
民
詠
為
家
初
立
子
之
王
第
立
也
可

文部省立第一中学校
漢文の上級者用の教科書

文在二色の角目一筋中
角の内側のねはもくこめりうよみとせんじふ

卷之三

卷之二

平
西
國

年月

将政家臣屏風の印材

七

永祐二年正月庚申某乞休

卷之二

居か爲めに手の事もつこまへうる事のあ林よ
吉光

卷之三

つれさむり

中華書局影印
卷之三

百代はあきのこの夕とかもうさり印枚さる
浦方邊下りよる時ハシヨウせゆて印
浦邊が製造業者
販賣する業者

浦方邊下りよる時ハシヨウせゆて印
印枚さる
浦中

花と庭園

あまくまきの印枚さるあわやを取る
は其も又通兩ツモリの事

瓦印枚さわら

神代より年ハサカよきつる枚さるいひを名めの處

印枚さる家事初ハタチ日ヒ後アフタ相羽サガミ

新富枚しんとみ寛元二年亡マツル頃

瓦印枚さわら年ハサカに年ハサカの様アラタニゆ

文永五年ハサカ一月イチギツ

○天武四年白弊
諸令上シテ
追新スル

同

スハま木キよ印枚さるうり之シテ年ハサカともトモと書シテ
月ハ年ハサカ毎ハシマ一月イチギツ
多ハのうしシい年ハサカ也ハシマとて官カムナの事モノと
名ハシマる
名ハシマる

○名葉

神良ミツコ元年青推海シロ作スル

大納言オノナゲ族ツクシ

シモニサヌ斗ト志シもんモの神ミかまカマすスル

建保三年夏ハ月イチギツ後アフタ二位家降カミヨリ

たハとの姓ソウをハシマすスルとハシマきスルの神ミかまカマすスルや

家集部不之
中年

中
考

伊豫九
吉川院ちかの百首
基傳
吉川院
正徳の御内侍
（吉川院一子）

丙申九月
日月合璧
大綱領

旅人道中
同
隆慶六年

毛利とひがひもせりてものをばくま
向角の事事あ
宣中内官早年
リモウ

也定然へりやうては風の吹き方のよろず考

卷之三

西の事に就て
宣を以て申す
うちのものよりと約定を講じよつまう

天祐三年二月三日內裏寄公霞
有原元吉

大正十三年
秋月
家集
文也

まちのひきもとへまつりあはせがと

中年
萬物也
ア

敬木
家集志
修禊游記

五と下をめぐらしもくよ
月のち仲季(かづの)のちくとく

敬
福中

福
福

の
敬

同

三
此

子

仲宣

子

なまこうひうみえよもゆらじと拂ふ事でもせん
福中

まくらすまきこすみきてのまゆりすあら森
福中

家事事中不隸

波伊

せりせりもとつしまわうるるす野屋の音いし

がくまもとくの匂よつもかゆわくもれどよ
元廣元年終化方山屏風山の因縁

おとと山古事記文成

三住季子

朝玉龜

明

百首

後也翁院南

もひすもお歌代南第すもとて新子ノ神よ見葉

同

順徳院内製

集若葉

後唐もも乍

うつもとくあきく葉とがよすのまよも

百首

般當院内制

おのめうきくわくもくのとくのちよあら

題

后也翁院南

玉の歌よわくすき経よとくわくよわく

元浦

かく

草木

着まつじす月の春の毎の花すつやをすら

以

は三の安和二年二月八日正事用さむを後
レキミ白川院にてす月一仰上候と

家集よりをれども

舟戻りつてゐるゝもとを子月のねの事とせば
毎日一首中

民謡ある家

きのけまゐはすうそのひよひてあまや
家集屏内二月山家つるうじふ

平風國

わざのじつけらもあらひえく家よつまき
わざ再び以屏内二月ねに若葉を記

桂宣経

ひねの五年此書はすす骨のつまほんわせ

恵度院所

車城主事もあらひえくよつまき
乗使三年二月庚申承す今

有原實樹

五十年かし題之云
同種詩之

人をうちもんじんもいふもとを身に附毛

同種詩之

三年百首は石葉

正佐家

御免五年し

國税らうまうじとま時令事の事もそれ

内

衣笠内臣

あもれの時津水とけよりますもすよすもす

楚

於樂不窮也

達觀無事也

無往而不遇也

萬物無所不包也

百首歌

東庵集解

二きりつしまひと風のくわづよわてぬあをれま
寛政元年春はく角屏風

正三位知家

先

まことめ時をもむきすく乞やのゆづら
百首社稿和幸

碑記所

雜文集 王の城野の古幸のひそすとま

利根川筆

桔梗正之耕

吉

君のこもれいせよせよせよせよせよせよせよせよ
文應元年基改歌合序

元

もとつじ事起れさの初幸幸

吉

ひたえも十精之歌可也百首

吉

凡うきりやうてきにしきをとものあくにす

同

家集文采をも美奇才

吉

合集序

同

題不知

新

同

王義子

新

同

賀文社百首

先

同

手をうきれこみつてやうしとあ

吉

寛元三年結縁經百首

民詠之為家

同

かくせれかせれそひのあうふるをとてこら

吉

六帖題とく

信東野

同

七経のねのくわくのきのむとくのくわくの

吉

正月二日百首

陳師克

仲四

の巻前

緋の女アメノヒメかくもを産アマツシテひもすらしておもよよりを
人ヒトをよ水ミズのこぎつてし羽アシタカたゞめの神カミのまほが
六帖題詩

氏アス馬家

新ハタケ六水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
六帖題詩

文應元年七社百首

同

新ハタケ七水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
七社題詩

同

新ハタケ八水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
八社題詩

同

新ハタケ九水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
九社題詩

同

新ハタケ十水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十社題詩

同

新ハタケ十一水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十一社題詩

同

新ハタケ十二水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十二社題詩

同

新ハタケ十三水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十三社題詩

同

新ハタケ十四水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十四社題詩

同

新ハタケ十五水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十五社題詩

同

新ハタケ十六水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十六社題詩

同

新ハタケ十七水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十七社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ十八水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十八社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ十九水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
十九社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十一水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十一社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十二水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十二社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十三水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十三社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十四水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十四社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十五水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十五社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十六水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十六社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十七水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十七社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十八水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十八社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ二十九水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
二十九社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

新ハタケ三十水田ミズタのあせよひくせうがみある神カミの
三十社題詩

同

古木詩

玉手中百首

支後経

己

の裏事あらわしの 梓う

つうじうかト

寝起ゆすり

まことしやる様限て露にまく木

と雪立つナリヤ

千五百番三う合

慈道和尚

王事をよろかうとの梓うにてまくもつてん
はう判共忠良云たらゆくとそ

内

參詣雅經

着あつしゆりよかほしきて此の葉にれまきのう
内

隆信胡内

王事をよろかうとひそてよをまきの王の毛くゆき

内

往二宿山陰

王自詠わきのうす水をよもよてりもくじ
文治六年五月百首

東大店をたゞ僊城

王事をよろかうとひそてよをまきの王の毛くゆき
内

青乃やかうの原よ搞井もよよとて神のすき
内

祇園社百首若菜

内

そひつうよの若菜と搞井もよよとて神のすき
百首詩序

まぬ事も入通接取

年もよろかうとひそてよをまきの王の毛くゆき
内

墨もく水もく闇の上のあみ野わくげやつむ

建保三年内大百首若菜

席中納言定まつ

内

たゞあくまくあくまのけぬよよ神力とくくよまき
内

往二宿家達

内

胡やくたもてこよ川もしのひの壁よりよみ

内

王事をよろかうとひそてよをまきの王の毛くゆき
内

新方右左

百首井川

有厚為頭

身とほい神とわうを井の内にわよあつてすまわる

建長八年百首寺今後多茶内里

あくたひまやまうをもすりとまうてくよまき

内

信重朝

神わすは内にまうりとてとくはすまやまてま
五段書き方書

弘安三年新桂野村百首

安あら庭家

三本すまむつてこ成すけも言ひてまざれ葉
家集栗井村至美

氏詠

新千葉
新経吹毛

文政元年毎首一首
春鹿をくわせぬまにせて蘆を壁に若葉とそじ
百首寺

内

古事記
春鹿をくわせぬまにせて蘆を壁に若葉とそじ
百首寺

内

時高の毛野す中く林の毛もあきてわたりもしゃじ
貞永元年四院校改め百首

薄雲に霞但る

足りせばくわせその羽子ともまくきらむ

内

五十首寺

従三位志

けぬやまを越人春來とぞうわまきしよらう

天文三年正月百首寄

同

朝日山のむすよ宮酒み半空少よりまうじ

千首中

民部元年

風

冬日とのとけすまめりすらやそにほんぢむ元
君業けやつまくとまきの時よ通すよまよすれむと
名カキもものか一ナカタカヒナモ業まじ給よ業達

文部元年正月百首君業

同

けくま文官まもとてじゆをもるのう歌よづくは

毎日一首中

冥ノも若業つゝいじきの毛のう歌い業まよひ

天文九年正月一首中

同

神垣すら川よすす井水すをあて神垣

正永二年正月一首中

同

人命よすのりふづけとばのとわしやま

文永七年正月一首中

同

冥々と毎すよもじく三行き先まよ歌と君業元

正永三年正月一首中

同

建永五年正月一首中

同

さとんや前田の君業とすくと行そふう玉川の水

同

がくまのうのすすすの原の風ふうりちよ風きよ業達

同

もとすにわづかし／＼とせむとせむの君業

同

君業とすくと行そふう玉川の水

同

がくまのうのすすすの原の風ふうりちよ風きよ業達

同

もとすにわづかし／＼とせむとせむの君業

同

君業とすくと行そふう玉川の水

同

がくまのうのすすすの原の風ふうりちよ風きよ業達

同

もとすにわづかし／＼とせむとせむの君業

同

毛蟲をすよつまくまうう三葉のわらうじ

嘉元年南庭百首

有原為良耕

那色よ出づもつともすしとまきつるがとれ

弘安元年百首

後九條内大臣

まろ時よ我そほまう御のうしよかすりま

六帖歌

國の力あて

千^{前さ}歌^見

もまづみ行うどこのまに

内^内歌^見

信実^{信實}歌^{信實}

まこととおとせつまつておきのりとす

王稚子

毛蟲^{毛蟲}歌^{毛蟲}

人毛^{人毛}歌^{人毛}

毛蟲^{毛蟲}歌^{毛蟲}

春^春歌^春詩^春

信实^{信實}歌^{信實}

題^題歌^題

毛蟲^{毛蟲}歌^{毛蟲}

内^内歌^見

信实^{信實}歌^{信實}

耶^耶歌^耶詩^耶

信实^{信實}歌^{信實}

六帖歌^見

信实^{信實}歌^{信實}

日^日歌^日詩^日

信实^{信實}歌^{信實}

日^日歌^見

信实^{信實}歌^{信實}

内^内歌^見

信实^{信實}歌^{信實}

日^日歌^見

白馬

正月三年毎日一首中あと二首

民歌為家之

又年々かきの羽がちと見えて、多くはさうある
内馬行

丁巳年夏
王穀祥書

六帖題

行のまゝの世のあつてよのたゞとあすと

四

のあらわしもとく行よま
てはまつたるもとく行よま

四

卷之三

1

支修類

家集五月七日小ねよけて縦幅のりへあはま

卷之三

大綱吉種作

卷之三

○方元年已云
始於生女時至

文永八年冬日一首中

松山文庫

卷之三

支本和歌抄卷第二

春詠二

題

鶯

霞

餘寒

残雪

玉水

苔草

春霜

寫

天慶二年歿上玄公 萬中納言主房

イ元牛

勢冲云古李物
に敏行のうぐす
とのみとよまれし
は花の零にうぐも
つぼのひぬと、
こびて鳴心をア
のからへと鳴本
とくみハあみを
比歌ハねのが名を
鳴くやうによられ
たる事いか

文治三年百首

万中納言主家

イ元牛

家と啼 不審牛

イ元牛

内五年百首

イ元牛

うくいどく家をあわくくれ行 トヨムカサシモロ行時

あ集初す寫

イ元牛

あむる年の初めすすすま胡室をすまゆる寫

百首奇

イ元牛

毛毛わといそめのりれきの初もととせよ告ぐじ

修成女

イ元牛

支治三年支歸入内山屏風寫

後半ちだ半

うくいとおもひづきてひきくひの林くとまくけむ

西原二年百首

面元缺片

御坐片

イ元牛

もの色い立ちれ

因イ

常立ちえりまかうひとくまきとくの房あひあひ

因イ

小侍役

イ元牛

うくいとおもひすりよてよもがくとひあはる

二三赤牛

家集寫

イ元牛

清浦朝臣

イ元牛

りい夢よ若だひととかくてももさうよもくとよ

因イ

をあむとにゆの啼 つわお車やけよりわよすとよ

二三赤牛

百朝牛

イ元牛

後院伊勢
きが近て五月
よすときねかね
いたれよせよ

イ元牛

をあむとにゆの啼 つわお車やけよりわよすとよ

二三赤牛

百朝牛

イ元牛

文永九年每日一首中寫

民部一
九

時もものかえのよしのむね
春推引 金井 乙唐 桜

春才奇

卷之三

卷之三

すと立派上の御もじの常を子ノ吉よすじ

不破の実あひ歌の定ひが
山伴
今水伴

野上

卷之三

の
吉
本

六
六

卷之三

七
百

立身有奇志，忘年不遺孤。本原元小宰相。

おのれはまくらとおもひてゐるが

卷之三

卷之三

三

聖人たるも必ずわざと立派の言ひ方を

卷之三

古事記

五十五
万五

卷之三

日英の事は三月の事と申す

山里の若木と子木を窮屈もつて五年の古一
年秋月

朱子語類卷之三十一

建仁元年九月廿日

翠もすりぬるにとまひゆ風よやかまきの

寫

通同社

守齋

すくて仰にしわいきのうとしのあひゆり
南也首番五合 俊宣校核

後漢書

新波道工
正
に
鶴
同
孫
建仁元年たる五十有三の今
同
高城やうすの心のをうちりてすそもしきひは

百首詩句
古詩一百首

萬千
萬山の聲に
人を喜ぶに
萬事の如き
萬事の如き

心事をもつてゐる方よしとおもひやうへきのあむかわ

万十首古詩

寶治五年十一月後二位有東記

後人之序

あはる三毛三月場のほせらやかに会旅宿喰る
ぬとてのまに去るをひゆうひとのまやもの室
程もいそれり一様行をあつきてくいと

建仁元年新舊二ノ合用改定

後二佳家傳

光時里も又通候。故都行幸。今寒野寫。

わらじ若もくひと時より生れかども、まきの
わらじ

達得三年家有百萬財

わらじと若さうじと野よしとも生ま
西山峯のあ
雪を拂はる
天子三萬石知
不思議事ゆきをち
建保三年家家百角市す
まゆまゆ入道橋改
智はりつ
刀
明智の古里もこれも足利としも鳥のむ

まほらも入道橋以
テリ。此の古里もこれと之別ども其の事のれ
弘長元年百首
後九條内大臣

家集

流有仲

ちくわの家

卷之三

の本上

西行の意
かすこへ
ゆく行の意
よみたけり
と云ふ
詠文を
かずこへ
ゆく行の意
よみたけり
と云ふ
詠文を

信若社百首歌

西行上人

同上

卷之二

家集まの物と和花と、おれが
人との、何うよ
和泉の歌

れも二十九年生れより
小野吉風七十歳夏屏風

大中後純宣胡氏

花はあらひのすまくいとはすまとやまとも
文永二年春日一月か風缺てをもと
嘗て色えりてとれやどもえとすまつるをす
内

外うべきはせよとあるすとほきつる事の物

三月の月の朝日は朝霞た失にちよとて伏
とく山店より下りてね上等といふ事人全
てけよとあらとそ

寫

五八

續

天祐元年四月裏之令

筆國

久の内事かやまた梅つえよしむ萬葉と晴が房

中納言

キヘイ

之

うしきへ言はゆくもすよつものす萬葉

判云けられ初すくいと先と多く事せら
ことありと云ふ為有之

族人

のイ

立

宣へそこりてうめうすのまへじよのまよとけ

起

伊勢

のイ

立

きめくあくまでもあひまくすあくわよとせつま

寛和二年六月内裏哥合寫

齊信

立

うめく風の音にや東うきよ若の寫生とぞ

家集

集

立

うめく風の音にや東うきよ若の寫生とぞ

家集

集

光

は二ニ集

まのま(集)

あらもひのつうみうみてもとよあうと
けぬす

七条店

までもひがまと思ひきれんだけにいてよ
上の大もんすよびよせよ色とれも入へとそ

平祐季

おもて作

おのじくあけてえまし、鶯の毛のうもあひすゑ
緑絲障弱不勝寫

大江千里

こまよえどりもえいよひけ本と
新水登鑑(新水)
行葉あきらかでわいと氣うつよ

福地云

まめよしてわらわらくとのよづりを風うねる
天送えき左月内裏の屏内すまう

清原元衡

まひとれどもくわやく用よすをしれ
お屏風月よねにいはれよ寫れあとみて

惠慶は仰

まもよこかがきて我我めり帰れどくれどくひ
中勢のを里よか、差三の十肩抜けよきと
帰れどくち井あらうきよそのうちしとをすう

家集

かきそれれれすとんもひてえみすえにひう帰

建仁元年秋桂公

野立大堂

おほき室もれやうじもうにえにひう帰

の詠水聲言
南枝花譜

内

前大納言忠良

捨秋節
重慶宣家
書寫し申す
手写の事

書寫し申す

送取の用われしもあらひゆきとひと
内

前半納言宣家

東陽やまとせ室のかひとく坐といほくうじゆ

内

席並は所

うみとれすもつりそちのやこにらすも内の室

内

家長朝内

太宰作話
獨坐えにえあれ
考えひよしと
義とさき

東陽もあまかよ今とくいとのと

内

は景と隆え

太宰作話
五郎忠昌は
喜きを考への
至る所これ

白扇と白花とやうくととのめぐらめ青葉の

内

叶梯のみと

屋

靴

太宰作話
五郎忠昌は
喜きを考への
至る所これ

内

有原惟任内

太宰作話
五郎忠昌は
喜きを考への
至る所これ

内

有原惟任内

嘸

舊にてあひじわと妻のりよぢりうりと常あす

内

永曆二年宵内裏寺会寫

有原惟任

仲

家集寫

松中納言を方て

建久八年正月

後一葉通天白山國之

墨本としめくわむしたしてちのとと書ひ

内

後九條内大臣

素因らしきとどりますとくせりうりとに書ひ

謝官弓用賊徒負

從

員

元年納言宣家

欲小飛

太白房
庵風にさよる
じきにうちる
ほする程ひ

第兩口右のあらぬアリハリナシのを
文庫六百五社有角

東大寺大文成

冥越のつじ前り居らむとぞのくじの

正治二年有角

同

春のくづひのよそひとあくま

五
五

文治六年正月入角屏風

後法性寺入通三月

今りもあうるまのくい鳥りよまきれども歸

在多院入通ニ京れよ五十角

後仲光

仲
正
一

うらりきのつひのくひどのもすめにてうよき之

在多院入通ニ京れよ

春歌日暮詩
九連桜報同
總教子見役の
田原正四
ざるのまこと、其まき使
こころうけり

萬葉上毛ハ竹生處ニともしのせよシカセテアヒ

御集萬

十精ニミ

吉志千人ノハクシヒトシ人ノミタキノ事也

治承三年正月入角有角萬

東大寺大文成

行水が絶えず人遙の水のよろれのうるの

同

糸井ちゆる水のよろれの水の氣争あくよの萬のと

じねのとくさくせかせかせかせかせかせかせ

の

みのとくさくせかせかせかせかせかせかせかせ

日毛葉不入り、自鳴
翠々は自鳴、
選方本

正源百首

三摩入通方大口

フ信年
やかたにうの
れふくわくやうの
選方本

久安百首行す

宗室院院製

夏夜乃簾拂
秋月乃簾拂
春風乃簾拂
冬雪乃簾拂

文治二年女侍入内御屏風人家も寫あ示

まほりすまほりす

まほりすまほりす

まほりすまほりす

まほりすまほりす

新緑草堂

百首あるふみにうつて寫はれ候事とのあす行

四年九社百首

五年山中百首

六年山中百首

七年山中百首

八年山中百首

九年山中百首

明月影のよきよきて書ひし筆を拂ひよ寫を拂

文永二年秋二重車

人

空の妙わらうとまどふ高り衣冠といふあり

千首二

うそいとむらじに壁下墨のよき株のよき筆を拂

影を拂

赤人

うそいのよきのよきよきよきよきよきよきよきよき

六帖是けうちきの跡

中務み

うち壁の筆のよきよきよきよきよきよきよきよき

吉野社納宣を写 安あ院宣

まみよもれやこくよみよみよみよみよみよみよみ

題

卷之三

卷之三

春末かと人よおうくいのをきへせみ
日なまきて
毎朝かと鳥とえすの大鳥太石をに

卷之四

建長六年三首歌合寫

卷之三

卷之三

卷之三
人也

文庫本
改易

卷之三

千五百萬石

卷之三

鳳春

1

卷

通鑑

三

三

卷之二

文治元年立社百肩 宝太店主大吉作成

りゆくわ誰のまへる さよはつもうなむ

千五百肩致合

野宮たん

梅えられたれの色とゆりと まあう寫事とし

建長八年百肩致合

高木作

まくらゆりうしんしきの和よこのよきく

詠鳥三年

人毛

金志林よりこせれ志野より五肩作成
月 玄年正月よりもしちくらむと桂をつじまつてお
月 ちらもこゑのくきをせんむすとあくらすてお
月 春かすみのうとすま御のえどひしておもきも
久安三月秋合花中當

旅人毛

鷺のこひてゆきわざわすやすれりと達
詠毛

千五百肩致合

宝太の柳のまきよ寄よ毛

平 旅柳

わらく或うやれいとせ牛井て帰すりよ

文治元年立社百肩 宝太店主大吉作成

あそどりとの色とすま御のく

老若五十肩致合

後肩作

月 まくらゆりの年よ毛せくもとせう毛の

家集竹林鷺

深井正

月 けい竹の林の友もりよやうやうよ來よ毛の

天平五年四月十一日詠古

才翁言家物

ひきのうけのやよくいとひきのうけとまつり
題文

後人之文

さむれいとしまさむれいとまつり
月同

長寺

五之
まほらはとひまよ

千にたり

こねまよ

写きあわ
片集中運放

をほ製

かとすのまもろにまのあらぐくのまくら

露

寛平五附居をう合

後人之文

書方

涼風言

家集

妙思

涼風言

家集

佐野胡

佐野胡

禪

家集

佐野胡

佐野胡

禪

家集

佐野胡

佐野胡

禪

家集

佐野胡

佐野胡

禪

家集

佐野胡

佐野胡

寒風言

涼風言

涼風言

まされぬよせゆかけてやとすもれやまち

玉よ

祓ア成ル

居表うるの屋の社もすまのすもれ立モレテ

走作三毛若下百首大淀浦

順徳院内裏

大「とのあとのとすまのりよ哀そのこねきのもと

春山草叶

後多麻院は製

任房翁や播磨のさの御さよがとすよわのね原

小野主百首四

四

御用が、もじよあらんかまのさにやみどく人
永歎ニ毛月一毛太仰言ふ傳子二合序鴻

平祐季

寶

うきのねのとくとくわくとくのとくかとく初
キつめにトもす会遠鴻羽衣

鴻毛明

時正うねうねうねうねうねうねうねうね
因慶橋改家百首露 赤中納言定家

スミ登日吉のとくのとくはくまのうまわら

十五百事致公

參教雅經

時正うねは吉宗れまくの上サヌキマツシテ

二毛首露

後宣德橋改

山里のあらのとくのとくまくとくまくとくの
又うねわくよしうらやまのとくのとくのとく

又うねわくよしうらやまのとくのとくのとくのとく

寶添ニ毛首首

後九条内大臣

はまひのまなむをくわうかすもや天のそめうゑ
貞永二年四月桂改家右衛門書

貞永二年
御院極改家
古有御印

支那事變之通稿

すまきれすまきれいくじゆのうとすまひす
同上前及
筆

金石

洞庭橘液

斯子之生也色也陰也其性也之於此也其父之氣也

卷之三

中華文庫

延保三年和歌正月後鳥羽院御製
毛の立す毛根りの毛をよつ毛の毛

正義の爲めに死んでゐる者も少くない。」

五

檜華集

人間の心の底の想ひをかくすの心事

文淵閣四庫全書

卷之三

一言齋集

建保三年壬辰夏
赤牛洞言定家子

卷之三

十五首歌合

國朝詩

大神吉百喜正之
怪の御子

百首以寄

順法院御筆

雅故之日のてよのメあさよまの氣のひりとお

建久元年一吉首
而中納言定家

大吉夜やすとひをの上とくをもじ草の色

承久元年十首詩節經霞

同

新^新卷上
喜^喜り詩のすみれを月^月すすりぞれに

貞永三年百首五

洞院持政

春日節やさしもちらくと美い氣の衣

洞院持政百首哀雨部^{アシハタ}百首

梓^{シラカシ}らもうまく

建保三年内大臣百首海霞

赤牛納言定家

かすと小波よゆづりやまとあよみとけすにだ風

同

後二位家隆

あそべくもあれよすとく海^{シマ}はあはぬ波のむらうす

承久三年内裏やくま山^{シマヤマ}とすと

支那事も通持政

もじらじきのけらもくゆく月よううすすこすり
承久十三年赤牛院寄合

赤牛院風

山^{ヒル}とはまの手すきにどらわくすみ海^{シマ}うす夢のと
赤牛院入道ニ承れすが五十首

百首

赤牛院

喜^喜り

人毛

ウタシ

皇太后大内後成

新正上

まやくちをれすよすりとけ柱原すすみ行

千百番歌合

寐すは所

おとて
きりきの音
の山の音
下るくらき

あ百番去等

田舎ての家

梓ちまはそこのわれとてうよすみこゑ

利禄も百番

同

まのすら裏の袖とけ枕かまくらうめぬ

文をえひ士社百番露

同

玉のすら衣かげりすらじとくとくすむあ

建唐えり裏詩す今と家露

同

若毛戸のすみれ色あきよしゆすてあらびよす

百番三五番中

夜深爲那

ま柳入りてさかせてすじうりとそらにまのあ

平家定とくわげう十番三つ露

奉狀あた

れどりのれどりとくまけつてかどりかすうまをあ

正月五年三鷹村十番三つ露

同

きののねをとせば露も露ともくわくから舟人

あ元々百番三つ露

同

かくよむのいりえりえりながらとくすじまか

あえ三年仙洞三つ露

同

立つもよしれすものいじよすあまら室の朝霧

同

庵のと

地主上人

すすりぬるにわだすまつは色はすまぢ
前人傳ひ後年秋公鹿

權傳臣云期

もひとくまよはねとさりうちもひのとすみ
家集めらる旅宿 情浦羽門
羽子えを先立ちよ立よううひととよかのうもの
陰祐羽門吉松山月
毛古家集め

佐二佐家隆

伊豫
家集寫中
後類胡
之毛毛ひりと若川を草すて病の毛毛はやま
治暦三年二月定経洞門教合

通鑑

外まよひやく秋方トテミカエミの手ミハキモヨリ
百肩印可 天多院入通ニ取可
あらす事モリナシモテキテキモシセトエミの山里
志乃院通ニ取可モハ辛肩ニ合

席蓮花所

心の爲めにうつすまへとて病とこしきれの村
洞庭精政家有翁題

卷之三

朝もあらうよとひの端よりともあらう

三百六十首歌合

花の香りをもつて
花の香りをもつて

正治二年五月

19

卷之三

董大納言清房

重陽をさかんにかこもれり
秋の風がさわぎて

卷一

春の日は舞ふべしとおもひますまへ

百首詩

三種の山野草の、氣を引ける所を記す。

春云子葉
晴窗
徐渭

國事之急，當以爲先。故不以爲辭。

南以蜀之令
無忘而尚

不^レ可^レ者^{アリ}也[。]

文集百首
詩春未到
未集
在海門山
同

そこのやまとくのうみもくすれはまゆる
五

百々古歌 同

かの神の御事にあつたるを

保善社同育開示

新宿のりくわすきのむらくにやのむら

和外元年十月廿八日
春之
清江

黒人吉のあらう神をもとめ
のり

同人

河上やまのこゑを歌ひて
筆者

同
家長折合

長元年白集
博古圖

名高水弟之歌合可危靈

卷之三

水とさへ此種のうえを氣が立つて居

卷之三

胡の教子をやうにせんと云ふ小くさうをもんと
年

諸葛孔明之奇人也。蓋其清心寡欲，
處士高風，無以過也。

卷之三

おまけにやうやくおまえの

年々送り人さへの心からとておもひ三日ち
まつりあわてておまかづのうすを

卷之二

治之不復可復也

六十九韻字二十九
支微匪擇是支衣

卷之三

梅之子

卷之三

卷之三

御心をあきらめぬまゝの事なりとて津波をひそむる所

嘉慶二年十一月
公湖家

卷之二

王門の所もすゞ立恩・ゆやけられぬ
以長三年吉陽山百首

弘長二年吉陽山百首

安東府志

建保三年正月廿四日
元

建保三年正月朔

卷之三

佐保野よかわのすれよどみすらわ
衣

卷之三

國朝文忠公集

付属の事の如きを表す
題目す
とよもやから
たる新脚
つら
時々

何莫齋

あすのちやがゆく雪のたまごと
家集まむ中 恵度は所
山里のいとしきと翁のすくゑのよろづ

白首翁の家

卷之五

う。うえうわよしきうち氣がましくけすきのう。
家集慶寺
と後
住住家達

後二位家譜

國事不以爲意也。但使國家
寬在三事，萬人肉面，屏固山家。
人過

卷之三

ままで算て二千石のあらわすあらじの水

卷一百一十一

卷之三

春の立木の山の家より取
むる事も出来ます

ひまわりの花の下で休むと
久々にまたお出でになつた
久松先生の音

卷之二

さすがにそれほどでもない
四手四目角立

四
年
正
月
一
日
午
署

同九年每日一首
同

同上

事もあつて時流のものもあつておそれきと
思ふが、

庚辰年夏月
毛業つむぎの本とす

W

家集

春の朝と朝陽の花と朝まで朝のまゝのつるさく
宮

百首三の
草葉と
同

建保二年正月朔旦
僧正玄

まちがはぬもしるすたまて まともめの森や

治元年正月五日
信久
也幸はばとあもんすと今こりを

寧二年五月廿日
年內侍

音書三合錄

前半卷

すとどもむくもひよこしとまやづきうみの
月

ままでわねりこりと黒き草の少^{タチ}の
内

老五十有二合

參詣雅禮

吉清ひじわくにむかへてすまにうちもをまほ

永久元年百有九月

仲宣胡

藝三叶はまよせ水

月

まゆきとまくやせきとちもむのすみぬれ

東大原吉郎

内

○残雪

文治二年百有残雪

あ半納言宦家

わきくねくわくとももくもくものあ

まゆきと通稿改家百有残雪

急然和

まゆきのねくねくわくとももくもくものあ

あ集時がまゆ

大納言經作

まゆきのねくねくわくとももくもくものあ

家集音辛そ

萬承

じくまゆ本極狼子法度をまくもくもくもく

承保三年二月陽明門院殿上寺合

高階改業

吉原家事あく書はりしもんくすはるを

城内院御時百爵

基作

清あら朝りかねるをもと年のかくとみ
文永元年士社百爵残ち

民教てゐ家

清あら朝りかねるをもと年のかくとみ
入りりたまふ

本多

春冰

家集池有ひ文冰書用

市中納言達房

神山しらべの水をうちとけてみどりの山やはるそく

日晦人用約

大宰太貳高遠

方

大正院御時百爵之会 市大納言別題

正月

王をきひとくわのうす ひよとくとてわち若河の水

家集古今一百考

佐佐家譜

三ツカ火水のもと源立つてこうに常とよばれ

家集

同

吉原家事あく書はりしもんくすはるを

家集古今一百考

源有介

朔月すがと川へすがまつもじとせん

三月牛首中

好是

正月 家集古今一百考

家集古今一百考

下元

七日

七日

株子内訳玉家之会比冰一重殊

本多

本多

本多

本多

本多

本多

本多

本多

本居宣長

すすめやせとくわくをうちゆのうそとおもひと

内

宣長

さら風とまほの水氷すみよせのまきを差せ

内

宣長

東風とけ果游フリす冰ヒのあるもあらまつ

内

宣長

春風ハものとしめうれて是れはまんじゆの

内

宣長

百育哥

内

宣長

も、うりえりとよとけむりとののこふにゆき

内

宣長

達保年百育

内

宣長

春風ハのめぐらすてまとたまわるのあは

内

宣長

六百齋シラク古今水ヒトツ

内

宣長

前毛水マツモのくわいとひめりとくわいとくわい水ミズのくわい

内

宣長

春風ハも、りるのすみえくわらすまきすすも

内

宣長

後事稿稿改

木の下りりれやまとすねね葉根のまくら
百育哥

宣長

順徳院御製

西山の水をもてて之に拂ひ去る

若草

六百番エラカサギ
海原松林氏
もさゆれかきの下せよとどりこゑすもあやねよ
無事心也

六

卷之三

まことにさうもひどく榮の事の
ことなり。天の事にて

歐陽文忠公集

仙洞柿车新供野徑看草

野原の人の神をさへまさらぬ事年のみ
あらわせぬ

凌家長年

卷之三

國學

18

卷之三

家五十首

南少林書院合

徐慎

二三の
ゆり

アラシ手頃りよきゆうきすのりかくすの
内
名作集卷之三
三
23年

卷之三
金言
卷之三
金言

御室之文也。其子也。其子也。其子也。

四

卷之三

萬世
家法

各處有水也無人

定名八年百首歌合
後二位志定之

卷之三

卷之三

子
庚午年頃
庚午年頃
庚午年頃

名取寺中古ち呂木代乃草

卷之二

予初不之信今聞此甚為子也。二十三日
立夏二年五月
衣笠內大臣

おもやくまはりのやうな御事のあさの原よしみは

建炎二年九月合
本清入道因

まくわく入のほこりもがくかみそりみうけのぬ
家集
前半納言主房

雅故にあつたゆゑ、すこちすこちほんじで、えど

益
新
行
芳

題をか

被ふるを

毛草の

あるゆゑとあゆ
まきわらひてすむわ

まきわらひてすむわ

文永元年正月百首 民部為家

もの小升つまつまつまきて辛も辛きぬまうめ

六帖足

四

しとこやつもひびわ葉の小升まれとくよも

春霜

人を

毛草

あるゆゑとあゆ
まきわらひてすむわ

千五百首手合

後鳥羽院行義

池水の小升まとけらわれおはながくよよまくよ

建保三年内大臣吉首主考

後二位並上

さゆづり毛草とさか葉の唐てすまつりつるまのあて
建保七年正月一首中

民部為家

きわらひの毛草の葉の唐てすまつりつるまのあて
内五年正月一首中

四

育の來ざじのあよもひとわきとけらわせねだもと
内三年正月一首中

四

わがの毛草とすみとす御る 畏よこいきう當時

正和三年正月一首中

ゆきもものゆきしきのよしとやのうの候

萬

稿

墨屋入通稿改定稿若葉
我心はうともつともあじよせのまがまえ

重主自長三日

寛永十三年八月七日

以次本挙令



